目から鱗

コインロッカーベイビーズ

村上龍
講談社
BOOK

一般に自由だと謳われる大学生活においても、閉塞感を感じずにはいられないことはある。自由を与えられたはずが、いつの間にか孤独を背負わされていたり、拘束や課題が手元から無くなったと思うと、知らぬ間に目標までも失くしていたりする。本作は日常につきまとうそんな閉塞感と真剣に戦争した２人の少年の物語である。コインロッカーに遺棄された２人の少年、彼らが生きる目的を、愛や信頼ではなく「破壊」に見出す過程を描いた、歪んだ冒険譚だ。

aBouT ストーリー

産声（うぶごえ）を上げたその場所は、暗く、狭く、蒸し暑いコインロッカーだった。

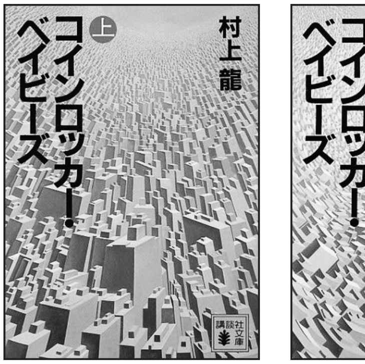
コインロッカーに遺棄され、奇跡的に息を吹き返した２人の嬰児（えいじ）『キク』と『ハシ』。彼らは生後もコインロッカーの記憶に翻弄され、現実に閉塞感を拭えないでいる。やがて自身の生の手触りを求めるために、2人はそれぞれの旅に出る。本作はキクとハシそれぞれの物語が並行して語られる形で進行する。

売春とドラッグが横行する無法地帯、ホームレスや外国人で溢れた真夏の東京、少年院、精神病院。２人が彷徨（さまよ）う舞台は、常にどこか閉鎖的だ。２人は社会の閉塞感に怒り、悩み、喘ぎ、狂気する。爆発的な感情は強力なエネルギーとなって、やがて閉塞感を打ち破る突破口を２人に与える。

「閉塞感から脱却する方法は何か？」

２人は「破壊の衝動」に答えを見出す。都市を廃墟に帰すべく立ち回るキク。歌手として、人を陶酔させ自制心をも奪う音楽を探し求めるハシ。２人の運命はクライマックスで交差し、文学だからこそ成し得る「破壊の衝動　＋　生の意志」という奇妙な結婚を果たし、ラストシーンは印象的なシーンで終わっている。ぜひ自身の眼で確認して欲しい。

本作を読み進めるうち、キクやハシの行動は倫理的に許されるものではないと感じる人もいるだろう。しかし、そのような違和感を抱きながらも、頁をめくっていくにつれ自身の中にキク・ハシの行動原理に共鳴する部分を見出すはずだ。それは、コインロッカーに閉じ込められたキクやハシと同じく、自身もまた何かに自由を奪われ、抜け出そうともがいているからである。現実には暴力的なエネルギーが満ち溢れていて、それから眼をそらすよりもむしろ、そのエネルギーをも取り込んでいこうとすることが現状を打破することに繋がる。この物語はそう私たちに教えてくれる。



◀村上龍氏最高傑作との声も高い。若手作家も多く影響を受けたとされる。

aBouT 著者村上龍

著者は「限りなく透明に近いブルー」で芥川賞を受賞し、近年では「13歳のハローワーク」などの著作で有名な村上龍。氏独特の文体が持つ歪んだ美は一筆に値する。臓物飛び散る禍々しい殺傷シーン・官能を通り越しグロテスクの域に達したといえる生々しい肉体交渉。同氏特有の執拗（しつよう）ともとれる超具体的な状況描写は、ともすれば読者を困惑させ、恒常的な不快感を与えるかもしれない。しかしながら、パンク・ミュージックやゴシック・ファッションが、わたしたちを圧倒しつつも特殊な魅力を発するのと同じく、本作の劇的かつ過剰装飾の文体に美を認めずにはいられなくなるはずだ。

訪れる温暖湿潤な季節への過渡期に。灼熱というにはあまりにも潤いを含んだ蒸暑の季節の予感に。爆発的なエネルギーで、自明のうちにあなたを取り巻く閉塞感を雲散霧消（うんさんむしょう）する快感を、どうか知って欲しい。　（taken）

はみだしすてーじ
4年間で消しゴム１個使い切れない
⇒消しゴムの代わりに使ってしまったもの……

（エ・２　まんまるのすけ）
（膨大な浪費した時間；編）